

連載「中東 混沌の中の秩序」 第4回 サウジ・イラン関係の緊張——背景と見通し



東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 池内 恵

2016年の年初から、サウジ・イラン関係の悪化が急激に進んだ。1月2日のシーア派説教師ニムル師の処刑に対して、イランで反サウジの群衆による大使館・領事館の打ち壊しが発生し、これに対してサウジが対イラン国交断絶を行った。GCC 諸国をはじめとした関係各国に、温度差はあるものの、追隨する動きが出た。

本稿ではサウジとイランの間の緊張の事実関係を整理するとともに、対立の構図や原因を探るための概念枠組みを検討しておきたい。また、一連の動きに対して、欧米メディアで広範にサウジ不信やサウジ批判の議論が噴出した。特に英語圏の主要メディアで表出された、欧米の政策論壇のサウジへの批判の高まりという現象それ自体が、今後のサウジ政治やサウジをめぐる国際政治に影響を及ぼす要因となりかねないがゆえに、注目すべき事実である。対照的に、イランは1月16日に核開発合意の「履行日」を無事に迎え、米国との緊密に息を合わせた外交と、巧みなパブリック・ディプロマシーにより、国際世論の好印象を高めている。イランが欧米諸国にとっての、サウジとの同盟を置き換える代替肢として認識されるほどの世論・政策論の変化が今後生じるのか、注視していく必要がある。

1. 年初の緊張の高まり

年初に急激に高まったサウジ・イラン緊張の基礎的な事実関係を踏まえておこう。

(1) ニムル師の処刑

サウジアラビア政府は1月2日（土曜日）に、この日あるいはそれ以前に47名の囚人を処刑したと発表した。罪状はいずれもサウジアラビア政府の定義する「テロリズム」に関与したというものだった⁽¹⁾。そこに4名のシーア派反体制派が含まれ、中でも特にサウジアラビア東部州アッワーミーヤを拠点とする、反体制的な説教師ニムル・バーキル・ニムル

(1) “Saudi Arabia executes 47 terrorism convicts, *Al-Arabiya*, 2 January 2016.
<http://english.alarabiya.net/en/News/middle-east/2016/01/02/Saudi-interior-ministry.html>

師が含まれていたことが、国際的な反響を呼んだ⁽²⁾。

(2) イランのサウジ大使館・領事館への群衆の抗議行動

ニムル師の処刑に対して、イランやイラクやレバノンで抗議行動が起こったが、特に強い反応が引き起こされたのがイランだった。テヘランのサウジアラビア大使館が群衆に踏み込まれて炎上し、マシュハドの領事館にも攻撃が行われた⁽³⁾。

(3) サウジの対イラン国交断絶

これに対して1月3日、サウジのジュベイル外相は対イラン国交断絶を発表した。駐イランの外交官を引き上げるとともに、駐サウジのイランの外交官に48時間以内の退去を通告した⁽⁴⁾。

(4) 各国の追随

サウジアラビアの対イラン国交断絶に、翌日以降、GCC 諸国を中心に、追随する動きが出た。バーレーンとスーダンが対イラン国交断絶し、UAEは駐イラン大使を引き上げて外交関係を格下げした。クウェートとカタールは駐イラン大使を召喚した⁽⁵⁾。

筆者紹介

1996年、東京大学文学部イスラム学科卒。アジア経済研究所研究員、国際日本文化研究センター准教授を経て、2008年10月より現職。ウッドロー・ウィルソン国際学術センター客員研究員、ケンブリッジ大学客員フェロー、アレクサンドリア大学客員教授などを兼任した。中東地域研究、イスラーム政治思想を専門とする。主要著作に『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』（講談社、大佛次郎論壇賞）、『アラブ政治の今を読む』（中央公論新社）、『書物の運命』（文藝春秋、毎日書評賞）、『イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社、サントリー学芸賞）、『中東危機の震源を読む』（新潮社）などがある。最新刊は『イスラーム国の衝撃』（文藝春秋）。

個人ブログ「中東・イスラーム学の風姿花伝」
(<http://ikeuchisatoshi.com/>) でも情報発信中。

-
- (2) 各国・各地での初期の反応については“Execution of Shia cleric sparks international outrage - as it happened,” *Guardian*, 2 January 2016.
<http://www.theguardian.com/world/live/2016/jan/02/middle-east-condemns-saudi-execution-of-shia-cleric-live>
 - (3) “Iranian Protesters Ransack Saudi Embassy After Execution of Shiite Cleric,” *New York Times*, January 2, 2016.
http://www.nytimes.com/2016/01/03/world/middleeast/saudi-arabia-executes-47-sheikh-nimr-shiite-cleric.html?_r=1
 - (4) “Saudi Arabia cuts ties with Iran as row over cleric's death escalates,” *Reuters*, January 3, 2016.
<http://www.reuters.com/article/us-saudi-security-iran-fury-idUSKBN0UH00C20160103>
「中東かわら版 No.144 サウジアラビア・イラン：国交の断絶」2016年1月4日、中東調査会。
http://www.meij.or.jp/kawara/2015_144.html
 - (5) 中東かわら版 No.145 サウジアラビア・イラン：国交断絶を巡る周辺国の動き」中東調査会、2016年1月5日。
http://www.meij.or.jp/kawara/2015_145.html
「中東かわら版 No.148 サウジアラビア・イラン：国交断絶を巡る周辺国の動き(2)」中東調査会、2016年1月7日。
http://www.meij.or.jp/kawara/2015_148.html

(5) イランが駐イエメンのイラン大使館の爆撃被害を主張

1月7日には今度はイランが、イエメン・サヌアのイラン大使館がサウジ主導の空爆により被害を受けたと主張した。しかし実態は不明であり、その後決定的な情報も出ていない⁽⁶⁾。この頃からサウジ・イランの対立は膠着状態に達し、沈静化の段階に入ったようである。

2. 宗派对立か新冷戦か

サウジとイランの間の、年明け早々の緊張の高まりに関しては、一般メディア・論者には往々にして、その原因や結果や影響を、明確な定義や論理的関係を明らかにせずに「宗派紛争」として報じ、論じる傾向が強かった。同時に、サウジとイランの対立を「宗派紛争」ととらえることに、専門家からは否定的な見解が多く表明された⁽⁷⁾。

サウジとイランの対立が宗派紛争を「原因」としていると論じるのは、中東の国際関係の構図を単純化し、原因と結果の連なりを誤解させ、見通しを誤らせかねない。

ただし、サウジやシリアやレバノンやイラクで、シーア派やアラウィー派やスンナ派、あるいはキリスト教諸派を含む、宗教・宗派単位での帰属意識の高まりは顕著である。それにより宗派コミュニティの結合が強まり、宗派コミュニティ間の亀裂に応じて政治対立・武力紛争が頻発化する傾向があることも否定できない。人々の日々の生活における宗教・宗派による結合が各国の国内政治に与える影響を無視しては、各国政治のダイナミズムを適切に把握し将来を見通すことはできない。

しかし各地で存在する宗派によるコミュニティ結合と政治対立が、サウジ・イラン間の

(6) 「中東かわら版 No.150 イエメン:サウジ軍機によるイラン大使館爆撃情報」中東調査会, 2016年1月8日。

http://www.meij.or.jp/kawara/2015_150.html

(7) Toby Matthiesen, “The World’s Most Misunderstood Martyr,” *Foreign Policy*, January, 2016.

<http://foreignpolicy.com/2016/01/08/the-worlds-most-misunderstood-martyr/>

“The cold war between Saudi Arabia and Iran that’s tearing apart the Middle East, explained: The supposedly ancient Sunni-Shia divide is in fact very modern - and it’s not really about religion,” *Vox*, January 4, 2016.

<http://www.vox.com/2016/1/4/10708682/sunni-shia-iran-saudi-arabia-war>

“The real roots of Sunni-Shia conflict: beyond the myth of “ancient religious hatreds”,” *Vox*, January 5, 2016.

<http://www.vox.com/2016/1/5/10718456/sunni-shia>

“Saudi Arabia Vs. Iran: Why Their Feud Goes Beyond Sectarian Tensions,” *NPR*, January 5, 2016

<http://www.npr.org/2016/01/05/462059807/saudi-arabia-vs-iran-why-their-feud-goes-beyond-sectarian-tensions>

“What’s the Saudi-Iran Feud Really About?: The Sunni-Shiite divide doesn’t explain it, according to one expert,” *Atlantic*, January 7, 2016.

<http://www.theatlantic.com/international/archive/2016/01/iran-saudi-sunni-shiite/422808/>

Saudi Arabia vs Iran: Beyond the Sunni-Shia narrative, *Al-Jazeera*, 9 January 2016.

<http://www.aljazeera.com/programmes/listeningpost/2016/01/saudi-arabia-iran-sunni-shia-narrative-160109103036343.html>

国際政治における対立の「原因」になっているとは言えない。サウジ・イランの間の対立は地政学的なものであり、湾岸地域とその周辺の中東における覇権をめぐる競合が原因となっている。両国は各国の紛争で、それぞれにとって親和性の高い勢力への支援を行い、影響力を競い合うため、サウジ・イランの地域規模における対立は、宗派によって陣営の色分けがなされがちになる。各地に存在する宗派主義に、サウジ・イランの地政学的覇権競争が絡むことで、結果的に中東の国際政治が宗派主義的になっていく、というのが実際の因果関係だろう。少なくとも「教義の相違」によって対立が生じているわけではないため、例えばイランはスンナ派のトルコとも経済や安全保障上の関係を深めており、同様にUAEとの経済関係も深い。スンナ派の中でもサウジとカタールがしばしば対立し、サウジはスンナ派のイスラーム主義勢力、特にムスリム同胞団とは激しく対立している。

中東地域で実際に存在する対立の原因や構図、国際紛争のメカニズムに関して、包括的に概念枠組を提示したのが、ペルシア湾岸国際政治の専門家のグレゴリー・ガウス（テキサス A & M 大学教授）の『宗派主義を超えて——中東の新しい冷戦』⁽⁸⁾である。2014年7月刊行のレポートだが現在の情勢を理解するためにも一読の価値がある。このレポートではサウジとイランの対立と、それを軸にした中東国際関係を、「新冷戦」として解釈する。この見方からは、地域大国間の覇権競争が根本的な原因であり、各地の紛争・内戦の当事者となる政府及び非国家主体に対して、サウジ・イランの両地域大国が支援を行って影響力を競い、代理戦争的に紛争を長期化させているものとされる⁽⁹⁾。

3. ニムル師処刑の解釈

サウジアラビアがニムル師を処刑したことは、結果として、イランを中心に宗派主義的な抗議行動を惹起した。しかしサウジアラビアのニムル師処刑は、国内的文脈から見て、宗派对立の一環として理解されるべきなのだろうか。また、サウジアラビアは国際的に宗派紛争を煽ることを意図してニムル師処刑を行ったのだろうか。そもそもイランなどの強い反発をどこまで予想していたのだろうか。これらは議論が分かれる問題である。

まず、国内問題としてのニムル師処刑にはどのような意図があり、意味があったと見るべきだろうか。ニムル師が政治犯となるに至った原因には、サウジアラビアの社会に厳然

(8) F. Gregory Gause, III, "Beyond Sectarianism: The New Middle East Cold War," Brookings Doha Center, July 22, 2014.

<http://www.brookings.edu/research/papers/2014/07/22-beyond-sectarianism-cold-war-gause#>

(9) 同様の枠組みに従った解説として、例えば Marc Lynch, "Why Saudi Arabia escalated the Middle East's sectarian conflict," *Monkey Cage-Washington Post*, January 4, 2016.

<https://www.washingtonpost.com/news/monkey-cage/wp/2016/01/04/why-saudi-arabia-escalated-the-middle-east-sectarian-conflict/>

とした宗派的な差別や支配従属構造があることや、スンナ派の支配的教義の解釈からシーア派に否定的な教育・宣伝が行われていたり、シーア派の市民的・政治的な権利の制限についてシーア派市民の不満があることが挙げられる。その意味で、ニムル師の問題は宗派によるサウジ社会の分裂や対立に根ざしている。

しかし今回のニムル師の処刑により、サウジアラビア政府が宗派对立を煽ることを意図していたと見ることも早計だろう。ニムル師と同時に処刑が発表された47名のうち、43名はスンナ派の反体制派だった。サウジにとって今回の大量処刑の最大の目的は、サウジアラビアの支配的イデオロギーであるワッハーブ主義の理念を一定程度共有し、体制にとっては脅威が大きい、アル＝カーイダ系の過激派に対して一歩も引かない強い姿勢を内外に示すことただだろう。国際的には、アル＝カーイダに端を発する「イスラーム国」にイデオロギーや資金を供給したとしてサウジアラビアの体制や社会に対する批判や不信感は根深い。それを払拭するために、サウジアラビアはそれまで控えてきたアル＝カーイダ系収監者の処刑をここで断行したと考えられる。それ以前に、国内向けに、体制への挑戦を一切許さないという断固たる姿勢を示すためのものだったと考えられる⁽¹⁰⁾。

ただし、処刑の対象にシーア派の反体制指導者を含めたことは、国内に対しては、宗派による社会の分裂を念頭に置き、宗派对立の刺激をある程度見越した上でのものだった可能性は否定できない⁽¹¹⁾。スンナ派の過激派の処刑は、サウジの社会を底堅く支える保守層から反発を招きかねない。そこでスンナ派の過激派の処刑と併せて、シーア派の反体制派も処刑することでバランスを取る、さらにはシーア派の反発を国内・国際的に引き起こすことによって、サウジ社会の多数派を占め、支配的勢力であるスンナ派の結束を固めるという深慮遠謀があった可能性はある。

そこにおいて、イランから宗派の親和性・結束に基づく批判・攻撃が行われることは予想されていたかもしれず、また、もし予想していなかったとすれば、サウジ政府の状況認識能力に疑問符が付されかねないという意味で、かえって別の由々しい憶測を誘う問題でもある。

4. 親サウジ陣営糾合の遅れ

イランからの強い反発をサウジアラビアが予測していたか否かについて、一つの観点からは、予測していなかったのではないかという推測が成り立つ。それは対イラン断交後の

(10) “Saudi Executions That Riled Iran Meant as Domestic Message,” Bloomberg, January 4, 2016. <http://www.bloomberg.com/news/articles/2016-01-04/saudi-executions-that-riled-iran-intended-as-domestic-message>

(11) “Saudi executions driven by fear of militancy, signal combative policy,” Reuters, January 4, 2016. <http://www.reuters.com/article/us-saudi-security-execution-jihadists-idUSKBN0UH0IW20160104>

周辺諸国・友好国の追隨の取り付けの遅れと不十分さである⁽¹²⁾。

上に要点を記した各国の追隨状況だが、より詳細・包括的に見てみると、サウジはGCCなどの周辺諸国やスンナ派人口比率の高いアラブ諸国やイスラーム諸国からの外交的な追隨を、決して有効・迅速には取り付けていない。サウジ陣営に関する限り、対イランの国際的・安全保障上の陣営形成において、宗派的な結束が高いとは言えない状況である。

1月2日の処刑発表に対して即座に抗議行動が生じると、翌1月3日にサウジは対イラン断交を発表した。リヤードに所在するGCC事務局の反応は当然早く、ザイヤニー事務局長が、GCC諸国がサウジと共に立ち、イランを非難するとする声明を同日に発表した。同様にアラブ連盟事務局も同様の声明を出した⁽¹³⁾。

しかし各国政府レベルでの反応は、緊密な関係にあるGCC諸国ですらも決して早いものではなく、同調・追隨の程度も様々であった。サウジの強い影響下にあるバーレーンは国交断絶で追隨したが、発表は翌1月4日になってからであった⁽¹⁴⁾。この日に国交断絶で追隨したのはバーレーン以外にスーダンだけだった⁽¹⁵⁾。

注目すべきはUAEである。軍事・安全保障面で近年にサウジアラビアとの連携を深めており、イランとは領土問題も抱えているにもかかわらず、サウジへの同調は全面的ではなく、1月4日に駐イラン大使を引き上げて外交関係を格下げるに留めた。クウェートとカタールは駐イラン大使の召喚に留めており、しかもクウェートは1月5日に、カタールは1月6日になってやっとこれを行った⁽¹⁶⁾。

GCC諸国の中でサウジとイランの間で中立・仲介の立場をとりがちなオマーンは今回もその立場を維持した。GCCの外のアラブ諸国からは、同じ君主制でスンナ派が多数を占めるヨルダンが、在アンマンのイラン大使を呼んで注意を伝達するのみだった。シーア

(12) もっともこの視点からの推測はあくまでも限定的なものに過ぎず、例えばテヘランのサウジ大使館でイラン政府や主要勢力による扇動あるいは黙認による抗議行動が行われることを予期して、外交官の退去を準備していたといった事実が現れてくれば、評価・判断は変わってくる。

(13) “Gulf states back Saudi in its fight against ‘terrorism,’” *Al-Arabiya*, 3 January 2016.
<http://english.alarabiya.net/en/News/middle-east/2016/01/03/Gulf-states-back-Saudi-in-its-fight-against-terrorism-.html>

(14) “Bahrain cuts ties with Iran, expels envoys,” *Al-Arabiya*, 4 January 2016.
<http://english.alarabiya.net/en/News/middle-east/2016/01/04/Bahrain-cuts-ties-with-Iran-.html>

(15) “Sudan follows Saudi, expels Iranian ambassador,” *Al-Arabiya*, 4 January 2016.
<http://english.alarabiya.net/en/News/2016/01/04/Sudan-decides-to-expel-Iranian-ambassador.html>

(16) 各国の追隨・同調の時間差や温度差については、次の分析を参考にした。「中東かわら版 No.145 サウジアラビア・イラン：国交断絶を巡る周辺国の動き」中東調査会，2016年1月5日。

http://www.meij.or.jp/kawara/2015_145.html

「中東かわら版 No.148 サウジアラビア・イラン：国交断絶を巡る周辺国の動き(2)」中東調査会，2016年1月7日。

http://www.meij.or.jp/kawara/2015_148.html

派が人口の多数を占め、現政権にもシーア派が多い、イラクは1月6日にサウジとイランの仲介を申し出た⁽¹⁷⁾。非アラブの中東諸国からはトルコも仲介を申し出ている⁽¹⁸⁾。

1月9日にはリヤードでGCC 臨時外相会議が、1月10日のカイロでのアラブ連盟臨時外相会議が開かれ、いずれもイランのサウジ大使館への攻撃を非難する声明で一致したものの、具体的な措置は取れていない⁽¹⁹⁾。

サウジが軍事力を増強する際に、兵員の担い手として、あるいは核兵器の保有国として潜在的な抑止力の提供元として注目が集まるのがパキスタンである。サウジはイランとの対立激化を背景に、パキスタンに外交攻勢をかけている。1月10日にムハンマド副皇太子・国防相はパキスタンを訪問しラウルピンディではラーヒール・シャリーフ陸軍参謀総長と、首都イスラマバードではナワーズ・シャリーフ首相と会談し、サウジの防衛を支援する旨の発言を引き出している⁽²⁰⁾。しかしこれは従来から繰り返してきた言明を超えるものではなく、財政面での有力な支援国であるサウジアラビアから、サルマーン国王の子息でもあるムハンマド副皇太子が直々に訪問しての直談判に対して、一定の好意的発言をする以外の選択肢はないだろう。パキスタンの対イランでのサウジの意向に沿った具体的な措置は明らかではなく、パキスタンはサウジとイランとの間で板挟みになっている様子がある⁽²¹⁾。今後パキスタンはサウジへの依存から脱却していくという観測もある⁽²²⁾。シャリーフ

(17) “Iraq offers to mediate between Saudi and Iran, fearing for ISIS campaign,” *Reuters*, January 6, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-saudi-iran-iraq-idUSKBN0UK11A20160106>

(18) “Turkey’s Erdogan says Saudi executions are a domestic issue,” *Reuters*, January 6, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-saudi-iran-turkey-erdogan-idUSKBN0UK1K320160106>

(19) “Saudi FM warns of additional measures against Iran,” *Al-Jazeera*, January 9, 2016.

<http://www.aljazeera.com/news/2016/01/saudi-fm-warns-additional-measures-iran-160109143057928.html>

“Arab League condemns Saudi embassy attack10,” *Al-Arabiya*, January 2016.

<http://english.alarabiya.net/en/News/middle-east/2016/01/10/Saudi-accuses-Iran-of-undermining-regional-security.html>

(20) “Threat to Saudi Arabia to evoke Pakistan response,” *Al-Arabiya*, January 10, 2016.

<http://english.alarabiya.net/en/News/middle-east/2016/01/10/Pakistan-to-respond-to-Saudi-s-territorial-integrity-threat-167.html>

“Pakistan says it will respond to any threat to Saudi Arabia,” *Washington Post*, January 10, 2016.

https://www.washingtonpost.com/world/asia_pacific/pakistan-to-respond-to-saudi-territorial-integrity-threat/2016/01/10/be295ac6-b7a8-11e5-85cd-5ad59bc19432_story.html

(21) “Pakistan Is Caught in the Middle of the Conflict Between Iran and Saudi Arabia,” *Time*, January 11, 2016.

<http://time.com/4174835/pakistan-iran-saudi-arabia-sunni-shiite/>

Bruce Riedel, “Why do Saudi Arabia and Iran compete for Pakistani support?” Brookings Institution, January 11, 2016.

<http://www.brookings.edu/blogs/markaz/posts/2016/01/11-saudi-arabia-iran-compete-for-pakistan-riedel>

(22) “Pakistan’s Pivot,” *Foreign Policy*, January 14, 2016.

<http://foreignpolicy.com/2016/01/14/pakistans-pivot/>

首相は1月18・19日のサウジとイランの歴訪を通じて仲介役を試みる模様である⁽²³⁾。

中東やアラブ諸国の主要国、さらにはGCC諸国の中でも温度差がある中で、アラブ民族への帰属意識が文化的・言語的にそれほど強くないが外交上の利便性などからアラブ連盟に加盟しているジブチ（1月6日）⁽²⁴⁾、ソマリア（1月7日）⁽²⁵⁾、コモロ諸島（1月13日）⁽²⁶⁾などがイランとの国交断絶を発表したが、実質的な意味は乏しいだろう。全面的に追随してみせる国の大半を「便宜アラブ連盟加盟国」が占める状況では、サウジがイランに対して強力な包囲網を示し得ているとは言えない。このことはまた、サウジ・イランの対立をめぐる国際的な陣営が宗派によって分けられるのではなく、各国の政治的な利害関係の判断に基づいていることもよく示している。

なお、エジプトは1979年のイラン革命の際に、亡命したパーレビ朝のシャーを匿って以来、イランとの国交関係を絶っており、今回サウジの対イラン国交断絶に追随する姿勢を示す必要はなかった。また、イエメンもハーディー政権がフーシー派によって首都を追放され国外逃亡にまで追い込まれた過程で、フーシー派を支援すると疑ってイランとの国交を絶っている。

5. サウジ批判の高まり

現時点では、ニムル師処刑をめぐる沸き起こったサウジ・イラン間の国際的な対立は、両国の直接の軍事衝突に至るようなエスカレーションに至るよりもかなり前の段階で膠着し、沈静化しているようである。また、間接的な紛争の激化という形での影響・波及も限定的である。シリア内戦をめぐるのは元来がサウジとイランで利害や目標が食い違っておりもともと協調ができておらず、サウジ・イラン間の関係の度合いによって、シリアをめぐる協調の可能性が低まるとも言えない。イエメンに関しても同様である。

むしろ今回のサウジ・イラン関係の紛糾に際しては、対サウジの批判的な論調が、欧米

(23) “Pakistan PM looks to play peacemaker with Saudi Arabia, Iran visits,” Reuters, January 17, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-pakistan-saudi-iran-idUSKCN0UVOVN>

(24) “Djibouti cuts ties with Iran, says Saudi-owned TV channel,” Reuters, January 6, 2016.

<http://af.reuters.com/article/topNews/idAFKBN0UK1R820160106>

(25) “Somalia Severs Ties With Iran, Stands By Saudi Arabia Amid Regional Tensions,” *International Business Times*, January 7, 2016.

<http://www.ibtimes.com/somalia-severs-ties-iran-stands-saudi-arabia-amid-regional-tensions-2254193>

ソマリアは見返りに5,000万ドルの援助をサウジから約束されたとする報道がある。“Somalia received Saudi aid the day it cut ties with Iran: document,” Reuters, January 17, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-somalia-saudi-iran-idUSKCN0UVOBH>

(26) “Comoros becomes latest country to sever ties with Iran,” *Gulf News*, January 15, 2016.

<http://gulfnews.com/news/africa/comoros-becomes-latest-country-to-sever-ties-with-iran-1.1654175>

を中心とした国際メディアに多く現れたことが特筆される。従来であれば、イランとの対立に関する限り、欧米諸国のメディアは同盟国としてのサウジに共感的であることが多かった。サウジと GCC 諸国は、サウジ系資本のアラビア語衛星放送局アラビーヤやカタール王家が支配下に置くアル＝ジャジーラ、あるいは汎アラブ主要紙の『シャルクル・アウサト』など、地域の有力メディアを押さえて好意的な報道と論調を作り出してきたという背景もある。イランの台頭を警戒するイスラエルと親イスラエル論者とメディアが、イラン非難の文脈で欧米のサウジとの同盟の重要性を強調する傾向もある。

サウジとイランは、地域覇権の競争を背景に、それぞれの影響下にあるメディアを用いて、相互に非難を交わす宣伝戦を繰り広げてきた⁽²⁷⁾。今回の緊張の高まりの中で、その宣伝戦の激しさは一層増した。その点ではレトリックの過激さの度合いが高まっただけで、従来からの対立に質的な変化はないと見えるかもしれない。

しかし今回のサウジ・イランの対立激化を機会に、欧米の主要メディアで、有力・著名論客を含め、一斉にサウジ批判と間接的なイラン擁護の論調に転じたことがより重要な点である。『ワシントン・ポスト』紙は1月3日に「サウジアラビアの向こう見ずな政権」と題した社説を掲げ⁽²⁸⁾、『ニューヨーク・タイムズ』紙も1月4日にサウジの処刑を「野蛮」と形容する社説を掲載した⁽²⁹⁾。同日の同紙の記事の中では、サウジによる批判への反論がPR会社を通じて伝えられていることをあえて記すなど、サウジの議論の正当性・妥当性に極めて冷ややかな態度を剥き出しにし⁽³⁰⁾、さらにサウジ政府が宗派对立を政策的に推し進めていると従来から批判的な専門家トービー・ジョーンズの論説を掲載している。この論説では「真の問題はサウジアラビアが暴力的な宗派主義と共に生きようとしているだけでなく、今やそれなしでは生きられなくなっていることだ」と痛烈にサウジ政府の責任を論じる⁽³¹⁾。『フォーリン・ポリシー』誌になるとさらに痛烈で、イラン系とみられる論者の「サウジアラビアは中東のジョージ・W・ブッシュ」ときき下ろす論説を掲載した⁽³²⁾。『ハフィ

(27) “Iran and Saudi Arabia ramp up hostile rhetoric to new levels,” *Guardian*, <http://www.theguardian.com/world/on-the-middle-east/2015/oct/23/iran-and-saudi-arabia-ramp-up-hostile-rhetoric-to-new-levels>

(28) “Saudi Arabia’s reckless regime,” *Washington Post*, January 3, 2016. https://www.washingtonpost.com/opinions/a-reckless-regime/2016/01/03/6705649c-b226-11e5-9388-466021d971de_story.html

(29) “Saudi Arabia’s Barbaric Executions,” *New York Times*, January 4, 2016. <http://www.nytimes.com/2016/01/05/opinion/saudi-arabias-barbaric-executions.html>

(30) “Shiite Cleric Gained in Status as a Rivalry Deepened,” *New York Times*, January 4, 2016. <http://www.nytimes.com/2016/01/05/world/middleeast/shiite-cleric-gained-in-status-as-a-rivalry-deepened.html>

(31) “Saudi Arabia’s Dangerous Sectarian Game,” *New York Times*, January 4, 2016. <http://www.nytimes.com/2016/01/05/opinion/saudi-arabias-dangerous-sectarian-game.html>

(32) “Saudi Arabia Is the George W. Bush of the Middle East,” *Foreign Policy*, January 5, 2016. <http://foreignpolicy.com/2016/01/05/saudi-arabia-is-the-george-w-bush-of-the-middle-east/>

ントン・ポスト』も、サウジアラビアを「失敗した大国」とする論説を掲載した⁽³³⁾。

このような風向きの変化を感じ取ったのか、米政権の意向をしばしば反映することで知られる、『ワシントン・ポスト』紙のコラムニストのデービッド・イグネイシャスも、1月5日にサウジの現体制の判断に疑問符をつける論説を発表している⁽³⁴⁾。同紙の1月7日付では、著名な外交論客でテレビ・パーソナリティーのファリード・ザカリヤーも、厳しいサウジ認識にもとづき、オバマ政権に、サウジとイランの間の宗派对立でどちらにも加担しないようにと主張する⁽³⁵⁾。

これらのサウジに批判的な論調の多くが、今回の大量処刑や宗派紛争の刺激といったサウジの個別の行動への批判にとどまらず、サウジの体制の性質そのものに対して疑問符を呈するものになっている点は興味深い。従来であれば、個々の行動ではなく体制の性質を問われていたのはイランだったからである。そして、サウジの体制の性質の問題が、サルマーン国王の子息で国防相であるムハンマド副皇太子の台頭とその権力集中という問題に集約されて議論されていることが特筆されるべきだろう⁽³⁶⁾。

6. 米のサウジとの同盟の再考・相対化

サウジの体制の性質そのものへの批判は、欧米の対サウジ同盟政策への批判に直結する。そこから、従来からの対サウジ同盟批判論者に論説の場が与えられることになる⁽³⁷⁾。『ニューヨーク・タイムズ』紙のウェブサイトでは、「サウジは危険な同盟国なのか？」という刺激的な総タイトルでサウジとの同盟への賛否の双方の議論を並べているが、掲載された4つの論説のうち2つは明確にサウジとの同盟に否定的で、1つが肯定的、もう1つは米国の姿勢に大きな留保をつけながらの限定的な肯定と、サウジ批判の方が若干多くなっている⁽³⁸⁾。

(33) Seyed Hossein Mousavian, “14 Reasons Why Saudi Arabia Is a Failed Mideast Power,” *Huffington Post*, January 7, 2016.

http://www.huffingtonpost.com/seyed-hossein-mousavian/saudi-arabia-failed-mideast-power_b_8934796.html

(34) David Ignatius, “The costly blunders of Saudi Arabia’s anxiety-ridden monarchy,” *Washington Post*, January 5.

(35) Fareed Zakaria, “The United States shouldn’t take sides in the Sunni-Shiite struggle,” *Washington Post*, January 7, 2016.

https://www.washingtonpost.com/opinions/the-united-states-shouldnt-take-sides-in-the-sunni-shiite-struggle/2016/01/07/a992713c-b56f-11e5-a842-0feb51d1d124_story.html

(36) “The most dangerous man in the world?” *Independent*, 9 January 2016.

<http://www.independent.co.uk/voices/the-most-dangerous-man-in-the-world-a6803191.html>

Patrick Cockburn, “Prince Mohammed bin Salman: Naive, arrogant Saudi prince is playing with fire,” *Independent*, 10 January 2016.

<http://www.independent.co.uk/news/world/middle-east/prince-mohammed-bin-salman-naive-arrogant-saudi-prince-is-playing-with-fire-a6804481.html>

(37) “The United States Shouldn’t Choose Saudi Arabia Over Iran,” *Politico*, January 4, 2016.

<http://www.politico.com/magazine/story/2016/01/saudi-arabia-iran-213504>

(38) “Saudi Arabia: A Dangerous Ally?” *New York Times*, January 4, 2016.

<http://www.nytimes.com/roomfordebate/2016/01/04/saudi-arabia-a-dangerous-ally?>

もちろん、サウジとの同盟の重要性を改めて主張する議論も提起されている⁽³⁹⁾。サウジとイランの地政学的な闘争において、米国が不用意に同盟を組み替えるか従来の同盟を軽視すれば重大なバランスの変化をもたらして地域情勢を一層混乱させるという危惧がその背景にあるが、同時に、サウジと米国の同盟の維持と、イランの排除を国益とするイスラエルの立場に好意的なメディア・論者が概してサウジに好意的であるという傾向もある。サウジとの同盟を一概に否定しないにしても、イランとの関係回復という目的と、サウジとの同盟を同列に捉え、その両立の困難さに注目する議論が増えてきている⁽⁴⁰⁾。米国の中東の原油への依存度の低下からも、サウジとの同盟関係は自明のものではなくなり、多くの批判的な論点を織り込みながら、地域情勢のバランスを維持するという高次の目的のための手段として正当化されなければならない論点となっている⁽⁴¹⁾。

このような厳しいサウジ論が表明されるようになった背景には、昨年7月のイラン核開発問題での合意が、欧米での対イラン関係改善の期待を高め、相対的にサウジとの同盟の重要性への認識が薄れたことがあるだろう。従来であれば欧米の主要メディアでは控えられたであろう、イランの対サウジ批判のプロパガンダ的言説が、欧米主要メディアを通して直接的に伝えられることを目にするのが普通になった⁽⁴²⁾。

イランが核開発合意を軸に、欧米との間で緊密で有効なパブリック・ディプロマシーを展開しているところも、サウジアラビアと対照的である。1月16日にIAEAは、イランが核開発合意を履行したと認証し、それを受けてイランのザリーフ外相とEUのモゲリーニ外交安全保障上級代表がウィーンで共同声明を発表した。同日にオバマ政権は対イラン制裁の一部解除を行ったが⁽⁴³⁾、それと共に、経済制裁破りを理由に有罪判決を受けるか訴追されているイラン人7人への恩赦を行い⁽⁴⁴⁾、その見返りにイランに拘束されてきた4人の米国人人質の解放で合意した⁽⁴⁵⁾。

(39) “Who Lost the Saudis?” *Wall Street Journal*, January 3, 2016.

<http://www.wsj.com/articles/who-lost-the-saudis-1451859635>

(40) David E. Sanger, “U.S. in a Bind as Saudi Actions Test a Durable Alliance,” *New York Times*, January 4, 2016.

(41) “Beyond oil: the US-Saudi alliance, explained,” *Vox*, January 6, 2016.

<http://www.vox.com/2016/1/6/10719728/us-saudi-arabia-allies>

(42) “Saudi will collapse if keeps its ‘sectarian’ policies: Iran Guards,” *Reuters*, January 7.

<http://www.reuters.com/article/us-saudi-iran-guards-idUSKBN0ULOXG20160107>

(43) “U.S. lifts ban on foreign units of American companies operating in Iran,” *Reuters*, January 16, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-iran-nuclear-companies-idUSKCN0UU16I>

(44) Exclusive: Obama pardons Iranians charged with sanctions violations

<http://www.reuters.com/article/us-iran-nuclear-legal-idUSKCN0UU0UL>

(45) “Nuclear sanctions lifted as Iran, U.S. agree on prisoner swap,” *Reuters*, January 17, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-iran-nuclear-zarif-idUSKCN0UU0C7>

イランは米国人囚人の帰国のための移送を欧米メディアに公開して行うなど⁽⁴⁶⁾,メディア対策でも欧米との呼吸が合っている。合意履行の宣言と制裁部分解除の寸前に持ち上がったペルシア湾のイラン領海での米海軍水兵10名の革命防衛隊による拘束についても、イランが早期に解放すると共に、米国がナビゲーションの過失を認めるなど、意思の疎通があることが明確である⁽⁴⁷⁾。米国は弾道ミサイル発射実験に対する新たな制裁の発動も一時送らせて人質交換交渉を阻害しないようにするなど、米イラン間の水面下での外交的協調は際立っている⁽⁴⁸⁾。

サウジの体制が少なくとも部分的には、欧米諸国、特に超大国アメリカとの不動の同盟関係に支えられているという点に、多くは異論がないだろう。もちろんメディア上の論調は、そのまま米政権の政策の変化や決定を意味しない。しかし欧米での世論や認識がやがては対サウジ・対イラン政策を方向づけていくと仮定すれば、今回のサウジ批判の言説の高まりと、それとは対照的なイランのパブリック・ディプロマシーの成果、それによる欧米のサウジとの同盟の相対化が進めば、サウジ内政やサウジをめぐる中東国際政治の今後の動向を見る際に、無視することのできない要因となるだろう。

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。

(46) Freed U.S. detainees arrive in Geneva, depart for Germany, *Reuters*, January 17, 2016.
<http://www.reuters.com/article/us-iran-nuclear-geneva-arrival-idUSKCN0UV0TS>

(47) “Exclusive: In negotiating to free Americans in Iran, U.S. blinked on new sanctions,” *Reuters*, January 16, 2016.
<http://www.reuters.com/article/iran-nuclear-prisoners-idUSKCN0UU0WW>

(48) “Exclusive: In negotiating to free Americans in Iran, U.S. blinked on new sanctions,” *Reuters*, January 16, 2016.
<http://www.reuters.com/article/us-iran-nuclear-prisoners-exclusive-idUSKCN0UU0WS>
“Obama: Iran deal, prisoner swap shows dividends of diplomacy,” *Reuters*, January 17, 2016.
<http://www.reuters.com/article/us-iran-nuclear-obama-statement-idUSKCN0UV0R2>